

欲と嫉

河野美砂子

(第41回)

夕映えをしづかに押ししてひらきゆく一輪の月 お前
が嫉い
岡井 隆 『夢と同じもの』

短歌を書きはじめて三年を過ぎたころこの歌に出会った。一九九五年のことである。実は掲歌は改作されたもので、私が最初に見たのは結句が異なった原作の方だ。

その前年から京都で始まった荒神橋歌会に、私は毎回緊張して参加していた。岡井隆、永田和宏、河野裕子各氏ら凄いメンバーの超結社歌会で、初学の私がついていけるはずもなかった。特にその夏からは、世話を私が担当することになり責任重大だった。まだコンピュータをほとんど誰も使っていなかった時代の話である。

幹事役第一回目の七月。締切は歌会前日の夜で、二十人近い方の詠草がファクスで集まった。ところが、肝心の岡井さんのが来ない。私は一応塔短歌会員だったので永田さんや裕子さんとはある程度近しかったが、岡井隆という人は、その声や風貌も含めて当時非常に近寄りがたい存在だった。夜中0時が過ぎ、0時半、一時……。

深夜一時半を過ぎて、ベルが鳴り出す。来た！
ずっ……ずっ……ずっ……ずっ……

夕映えをしづかに押ししてひらきゆく一輪の月 お前
が欲しい
岡井 隆

切り取った感熱紙の歌を見て、私は仰天した。……お前が欲しい……？……お前が欲しい……!!

なんと言ったらよいか、もう若くはなかったが短歌初心の私は、その台詞にイッパツで射止められてしまったのだ。その後諸先輩歌人から、岡井さんには騙されるなとか岡井さんの歌を読んだ女性歌人は誤解する等いろいろ聞かされたが、インプリンティングとは恐ろしい。

夜中のファクスの翌日、無記名互選の歌会では、前日の「事件」にもかかわらず岡井さんのその歌は相当評判わるかった。得票ゼロ。特に、結句「お前が欲しい」に対して厳しい意見が続出、私はひっそりと汗をかいた。

その後、この歌に私が再会するのは歌集『夢と同じもの』の中で、一年後のことだ。「欲しい」が「嫉い」に改作されている。「欲」と「嫉」の、たった一字が違うだけに、何という変わりようだろう。歌が、屹立している。岡井さんの「力技」を目の当たりにした思いだった。

後日談がある。また何年か後、右記の経緯を知らない小池光氏がエッセイでこの歌を取り上げた。そこで氏は、「嫉い」に言葉の力を見るとし、さらに、これは「欲しい」からの転換である、と、一言看破されたのだった。

角川書店『短歌』07年リA号